

# 「障害のある子どもたちを 「見える存在」に変えたい」

シニア海外ボランティアの上條貴子さんが、ボリビアの障害のある子どもたちと出会ってから8年が過ぎようとしている。社会から見捨てられた子どもたちの存在を認めさせるために奔走してきたこの8年は、次々と立ちちはだかる壁との闘いの連続だった。



## ボランティアの道を切り開く

夕闇が迫るラパスの街。職員が帰り支度を始めた教育省のビルで、上條貴子さんがひとときわ元気な笑顔で迎えてくれた。

ボリビア教育省特殊教育科に配属されているシニア海外ボランティアの上條さんは、今回で4度目のボランティア。初めてこの国に来たのは1998年、青年海外協力隊員としてだった。大学時代、特殊教育 について学んだ彼女は養護教員になるが、9年間の勤務の後退職、職を転々としているとき協力隊への応募を思い立った。「地元の長野には駒ヶ根訓練所があるので、協力隊のことは高校生のころから知っていたし、いつかやってみたいとあこがれていました」。

活動現場はボリビアで特に貧しいとされるオルコ県の障害児ケアの施設。「私の前にすでに何代も隊員が派遣され、ほかの施設と比べて設備も整っていた。「援助慣れ」しているように、やりづらかったですね」。

そのころ、オルコ県の学校や幼稚園で留年する子どもが多い



自費のボランティアとして活動していた2000年12月のクリスマス会。教室には予算がまっくらなかつたため、子どもたちが作ったクリスマスカードを販売し、その収益金で教材をそろえたり、施設を修繕したりしていた

ことに気付いた。「留年するのは障害があるからでは」と推測した上條さんは、オルコ市の教育委員会の許可を得て、障害児対象の教室を開く試験的なプロジェクトを行うことになった。

99年11月にスタートした教室では、5〜15歳の障害児約40人の指導に終日当たることができているのは上條さん1人で、ボランティアのリリアン・グスマンさんが半日ずつ手伝ってくれた。午前と午後の2クラスに分け、午前は重度の障害児、午後は自閉症児や学習障害児を対象にしていたが、「1人で座ることも食べることできない子どももいて、最初はパニック状態だった」と振り返る。

しかも、障害児の教育は保護者の役割が重要だが、日本では一般的な日記を使ったりやとりが、ここでは読み書きができない母親も多くて難しい。上條さんはスペイン語に苦労しつつ母親らに協力を直接説得し続けた。2000年8月、試行錯誤が続く中、彼女の任期終了が迫る。

「私が始めたプロジェクトだ、子どもたちに対して責任がある。このままやめるわけにはいかない」

## 初めてのうれし涙

そして9月、彼女は自費でボランティアとなった。

しかし、JICAでもNGOでもなく、個人で活動するのは想像以上に難しかった。当初3カ月間しか出せ

隊員時代から、「日本人が障害児を受け入れている」と教室のうわさが広がり、入室希望児はどんどん増えていた。

「この国では、障害のある子どもは家に閉じ込められ、存在を隠されてしまう。また、普通の学校に通っていても、勉強についていけず、先生やクラスメートにいじめられる。そんな行き場をなくした子どもたちが大勢

視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱、言語障害、情緒障害があるために、小中学校などの通常の学級での指導では十分な教育的効果が期待できない児童生徒に対して、自己の持つ能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し、社会参加するために必要な力を培うことを目指し、特別な配慮のもとに、より手厚く、きめ細かに行われる学校教育。



Kamijo Takako

シニア海外ボランティア

# 上條貴子

Stories of  
Challengers  
Vol.07



(上)知的障害児の散歩の様子。道が悪く車いすや歩行器の子どもを介助しながら歩くのは大変だったが、人々が次第に手を貸してくれるようになった。「家にばかりいた子どもたちが外に出ることは、さまざまな刺激を受けて成長に役立つだけでなく、オルロ市の人々の啓蒙にもりました」  
 (中)2003年5月17日、公立の養護学校として開校式を行った。制服のカーディガンは特注なので普通のセーターより割高だが、このときばかりは保護者も子どもたちのためにそろえてくれた  
 (下)2004年3月、帰国を控えた上條さんは最後に日本流の歯磨き指導の授業を行った。「最後の授業は本当に楽しいものだったが、もうここには教師として戻れないんだなあと思うと寂しかったですね」

市の補助もない。今度は校長代理として認可状を持って県や市と交渉する日々が始まりました。

彼女の粘り強い努力と、保護者や県知事など多くの人の協力で、何とか2人分の給与が支給され、さらにボランティアの先生が3人増え、11月には4クラス、100人近い生徒が訪れるようになった。12月からは学校運営や先生のサポートを行う協力隊の田中琴さんも加わった。自分の任期は04年4月に終了し、帰国することになる。だがこれで本当に終わりだろうか？ 見えない存在の子どもたちを見える存在に変えるために、やるべきことがまだまだあるのではないだろうか。

分の給与が支給

され、さらにボラン

生が3人増え、11月には4ク

ス、100人近い生徒が訪れる

ようになった。12月からは学校

運営や先生のサポートを行う協

力隊の田中琴さんも加わった。

自分の任期は04年4月に終了し、

帰国することになる。だがこれ

で本当に終わりだろうか？ 見え

ない存在の子どもたちを見える

存在に変えるために、やるべき

ことがまだまだあるのではない

だろうか。

分の給与が支給

され、さらにボラン

生が3人増え、11月には4ク

ス、100人近い生徒が訪れる

ようになった。12月からは学校

運営や先生のサポートを行う協

力隊の田中琴さんも加わった。

自分の任期は04年4月に終了し、

帰国することになる。だがこれ

で本当に終わりだろうか？ 見え

ない存在の子どもたちを見える

存在に変えるために、やるべき

ことがまだまだあるのではない

だろうか。

分の給与が支給

され、さらにボラン

生が3人増え、11月には4ク

ス、100人近い生徒が訪れる

ようになった。12月からは学校

運営や先生のサポートを行う協

力隊の田中琴さんも加わった。

自分の任期は04年4月に終了し、

帰国することになる。だがこれ

で本当に終わりだろうか？ 見え

ない存在の子どもたちを見える

存在に変えるために、やるべき

ことがまだまだあるのではない

だろうか。

### 父の死を乗り越えて

04年10月、上條さんはかつてオルロから通い続けたラパスの

「先生との給与は支給されず、県や」  
 況は何も変わらなかったのだ。  
 催されたが、認可が下りても状  
 な公立養護学校として開校式が  
 わけではなかった。5月、正式  
 まらなかった。  
 日、彼女は初めてうれし涙が止  
 が最高にうれしかった」  
 が行き場を失わなくて済むこと  
 リアンさんと日本の両親に電話  
 をしました。これで子どもたち  
 コピー屋に走り、震える手でリ  
 なくさないようにと言われて、  
 「今すぐコピーをして、原本は  
 書類にサインをしてくれたのだ。  
 書類にサインをしてくれたのだ。  
 見捨てられてしまおうのではない  
 か。そう危惧した上條さんは、  
 02年4月、教室が公立の養護学  
 校として認可されるよう政府と  
 の直接交渉を開始した。それま  
 でも市や県の教育委員会と折衝  
 していたがちが明かかなかった  
 からだ。午後にボランティアの  
 先生が来る日は、午前の授業を  
 終えるとバスに乗り、3時間か  
 けてラパスの教育省まで直訴に  
 通った。  
 通い始めて半年後の03年3月、  
 いつものように教育省に着くと  
 担当者がいない。外出先を聞き  
 出し会いに行くと、「君は探知機  
 でも持っているのか？どこにい  
 ても追いかけてくるね」と苦笑  
 しながら教育省に戻ってきた。

集まってきました」  
 当然2クラスだけでは間に合  
 わない。午前の授業時間をずら  
 して3クラスに増やした。「学習  
 に遅れのある子どもたちは、普  
 通学校の教育や教師の質が向上  
 すれば、ここに通う必要がない  
 はずですが、でもポリビアでは  
 らが難しいことも分かっていた  
 ので、自分たちの指導で少しで  
 も子どもたちが良くなってい  
 められることがなくなるなら、  
 と思ひ引き受けました」。  
 だが、ボランティアの先生が  
 1人増えたものの、いつまでも  
 無給で、運営費の補助もない無  
 認可の教室のままでは続けるこ  
 とも難しい。子どもたちも「見  
 えない存在」のまま、社会から

教育省にいた。ポリビアの特殊  
 教育制度を改善するため、シニ  
 ア海外ボランティアとして赴任  
 したのだ。

特殊教育の改善とはいえ、そ  
 もそもポリビアに特殊学校が何  
 校あり、どれだけの児童を受け  
 入れているのか、信頼できるテ  
 ータは皆無だった。そこで彼女  
 はアンケート調査を提案。分か  
 っている全国の施設に、学校の  
 形態や設備の状況、障害別の児  
 童の数、資金源など詳細のアン  
 ケート表を作成し、配布する。

しかし、その準備の最中、日本  
 から突然、父親の訃報が届いた。  
 ポリビアでくじけそうになる自

分をいつも励ましてくれる存在  
 だった。

「最初、協力隊を受けるとき大  
 反対されたのですが、今回ポリ  
 ビアに戻るときは、『恩返しをし  
 てこい』と送り出してくれたん  
 です。弱かった私をポリビアの  
 子どもたちが強くしてくれたの  
 だから」と

父の最期には立ち会えなかつ  
 たが、葬儀は上條さんの帰国を  
 待つて行われた。葬儀を終えて  
 「母を一人残してポリビアに戻  
 るべきか」悩む彼女に、母親は  
 「行ってきなさい。あなたの仕事  
 のほうが大事でしょう」と背中  
 を押した。

12月、ポリビアに戻った彼女  
 はアンケート調査を継続。調査  
 の結果、全国で特殊教育を受け  
 るべき対象児の3%しか特殊教  
 育施設で受け入れられていない  
 ことが分かった。97%の未就学  
 障害児をどうすれば減らせるの  
 か。特殊教育学校の整備だけで  
 なく、普通学校に特殊教育学級  
 を設け、少しでも「受け皿」を  
 増やすことが必要だ。教員の数  
 も足りないし、統一したカリキ  
 ユラムもない。

だが、それ以前にこの国には  
 障害者の登録制度が確立されて  
 いない。そこで全国の障害者協  
 議会の協力の下、障害者の診  
 断・登録、障害者カードの発行  
 というシステム構築のためのプ  
 ロジェクトが立ち上がった。ま  
 ずはラパスでシステムをつくり、  
 全国に波及させる計画だ。「障害  
 を持つて生まれた人は出生証明  
 も身分証明もない。彼らを公の  
 存在にしていけることが地位向上  
 の第一歩です」。

同時に、特殊教育のモデル校  
 をつくり、カリキュラムの統

一・改善も図っていく。「今の任  
 期が終わる今年10月までに、自  
 分がいなくなつた後もずっと続  
 いていくようにその基盤をつく  
 りたい。私の役割は、たくさん  
 の人が持つ力をつなげて一つに  
 することだと思えます」。

どこまでも前向きでエネルギー  
 ツシユな彼女にその源を尋ねる  
 と、「もちろん落ち込むこともあ  
 りますよ。そんなときは自分に  
 落ち込むために来たのではなく、  
 何かを良くするために来ている  
 のだと言いつけられる。それに私  
 が頑張るのは、いるんな人が  
 私を助けてくれ、また、頑張っ  
 ている姿を見せてくれて、勇気  
 をもらえるからです」とほほ笑  
 む。任期終了後も、「特殊教育分  
 野で自分に足りないものが分か  
 ったのでもっと勉強し、ポリビ  
 アでの経験を生かせる場所で仕  
 事がしたい」と意欲的だ。

彼女の謙虚な姿勢と、どんな  
 逆境でもあきらめない強さは、  
 これからも国境を越えて多くの  
 人に勇気を与え、夢を実現させ  
 る力に変えていくに違いない。



2005年8月に視察した知的障害児施設の子どもの中には、施設の職員に見つけられるまで、豚小屋で生活させられていたり、犬のようにつながれていた子どもがいた。「やりきれない思いでしたが、改めてこの国の特殊教育を改善していかなければと強く思いました」

### 弱かった私を、ポリビアの子どもたちが強くしてくれた



普通学校に通う、学習に遅れのある子どもを対象にしたクラス。学力が上がっても、家庭が貧しかったり、親が教育を重視しないために、働かざるを得ず、教室にも学校にも通えなくなった子どももいる。「貧困は、私たちにはどうすることもできない壁でした」